

山鹿温泉鉄道のおもひで

あの石炭の匂い、汽笛の音を忘れない
我らが「山鹿温泉鉄道」

写真提供／西村亮一氏・中村弘之氏・小澤年満氏



昭和34年(1959年)秋、来民を出発して菊池川橋梁に向かうキハ1

日々の暮らしは“住民の鉄道”とともに

かつて植木―山鹿間を走っていた「山鹿温泉鉄道」(旧鹿本鉄道)。「鹿本鉄道の石炭の匂いは、私たちのものであった」と当時を知る人が「鹿鉄五十年史」に記している。夕暮れの駅に鳴り響いた汽笛の音、ゴットンゴットンと重たくあえぐように走る車両の音、そしてトンネルに入ると車内に立ちこめた蒸気と石炭の匂い。乗客は素朴な木造りの椅子に腰掛けて、語り、笑い、時に煙でむせ返る。日々の暮らしは、“我らが「山鹿温泉鉄道」”とともにあった。当時の軌道をたどる自転車道をのんびり走れば、遠く汽笛が聞こえるようだ。



明治23年(1890年)に筑後川に架けられた九州初の鉄橋の一部が当時の「鹿本鉄道」に譲渡され、「菊池川鉄橋」(現第2分田橋)として架橋された。現在は、「水辺プラザかもと」にその一部が保存されている

昭和32年まで活躍したコックル製4号機。後方の水槽は水害で倒壊した。昭和26年植木駅にて小澤年満さん撮影

